

し、且その三項に就いて、その意義を神道の諸相の中に、歴史上それら主なる發現の例に徴して説明して居る。

即ち時代を、一、外來文化の影響を受けなかつた儒教渡來以前の太古、二、儒教渡來以後殊に佛敎的影響の著しい上古、中古また中世、三、儒教の發達と隨つてそれへの反抗を特色とした近世の三つに分け、この三期に於て神道が實現した様々の相を示して居る。

之によつて明らかな如く、著者が研究の對象として取上げて居るのは、教義や思想としての神道、即ち從來普通に神道史と呼ばれた分野に於て研究された方面であり、祭祀としての神道、即ち從來神祇史が對象としたる方面は別に民俗學的分野に於ける問題としてゐる。之は思想史の成立は文化の展開を意識の方面について見る所にありとする著者の考へと全く合致するものであるが、正しい意味の思想史は著者の所謂事象としての文化の展開をもその中に含まねばならぬのではあるまいか。而してもし日本神道の特質、換言すれば神道的なるものの本質に對する考察か、やがて日本的なるもの、即ち「東洋思想に於ける日本の特質」の究明にまで高められるとするならば、それは單に教義や思想としての神道をその對象とするのみでなく、祭祀としてのそれをも（更に云へば一般信仰の問題をも、即ち教義としての神道の考究の場合に於てもそれは信仰の問題を考へる事なしにはその發展の姿は把握出來ない）前者との相互關係の中に考察する必要があるであらうか。

ともあれ、日本思想史の研究に於て獨自の見解に立ち、その深

き考察を認めしむる著者の論考十七編を收めたる本書が、學界に與へる示唆の大なる事を述べて擲筆する。（菊判四六八頁、昭和十四年二月、東京岩沼書店發行、定價三圓二十錢）（清原宣雄）

本邦史學史論叢

史學會編

史學會が今年光輝ある創立五十周年を迎ふるに當り、その記念出版の一として本邦史學史論叢を世に送つた。本邦史學史論叢は、日本に於ける史學の發達の跡をたづね、更に將來の發展に資せんとして、廣く學界の人々の寄稿を求め、これを編纂して出來上つた論文集である。上下二卷總頁千五百餘に及び、我が學界の巨擘新進の研究四十二篇を收めてゐる。我々は本書を手にして、過去半世紀の間、常にわか史學界の最前線にあつて幾多の業績をあげ來つた史學會が、今や益々健實なる發展を遂げ、かゝる見事なる論叢を世に送る事に依つて、更にわが帝國の文化に寄與しつゝある事を思ひ、衷心よこびに堪えなかつたのである。もとより、從來とても我々は日本史學史の三四の著作を有してはゐた。然し乍らそれらはいまや本書の俸答に接して、自らその光を減ぜざるを得なくなつた感さへもある。まことに、本書の記念出版それ自體が、日本史學史研究上に記念さるべき事柄なのである。

さて、我々は少しく本書の内容に觸れる必要があるであらうが、何分にも四十數篇に及びそれぞれ獨自の主張を有する論文を一々吟味することは到底ここで出來る事ではない。従つて茲では、な

るべく批評的言辭に渉ることを謹しみ、單に目次を掲げる事に依つてその内容の一端を紹介し、且つ本書の編纂の方針が奈邊に強調的な面を有したかをかへり見るに止めたいと思ふ。本書は卷頭に辻善之助博士の「本邦に於ける修史の沿革と國史學の成立」と題する日本史學史の簡明なる通觀を掲げ、最後に大類伸博士の「最近に於けるヨーロッパ史學の狀態と本邦史學」と題する論文を載せてゐる。而してその間に古事記の古へより、現代に至るまでのわが國に於ける歴史學の發達に關する四十篇の論策を配してゐるのである。それ等の論文に於ては、執筆家各自が各々自己の立場に立つて堂々の論陣を張られ、あたかも陽春を迎へて萬衆の櫻花一時に咲き匂へるを望むが如き壯觀を呈してゐるのである。あるものは「天鏡の成立について」その著作年代と著者とを推定せんと試みられ（平田氏）あるものは「太平記原據」に關しては綿密なる本文批評をなし（後藤氏）あるは又、本文批評よりして「太閤記の成立とその本質」を質さんとされてゐる（桑田氏）。而して之等は花見氏の「本朝通鑑考」宮地博士「延喜式について」等の諸論文と共に、各々取扱はれたる歴史敘述が如何にして成立したかに一重點を有する論考と見られるのであるが、猶ほこの他に安藤氏の「古事記の文體論的研究」山本博士の「古語拾遺の史的價值とその後世に及ぼせる影響」藤氏「平家物語の敘述精神」喜田氏「類聚國史の編纂について」長沼氏「元亨釋書について」市村氏「大日本史の特色について」玉川氏「野史考」小野氏「日本開化小史とその時代」平泉博士「保建大記と神皇正統記」等の諸論説に見る如く、同じく一つ

の歴史著作を對象としながらも、自ら別な觀點に立つて獨自の見解を呈せられるものもある。而して更に松本氏「中朝事實と武家事紀」中村博士「史家としての新井白石」村岡氏「史家としての木居宣長」竹岡氏「史家としての平田篤胤と伴信友」中山博士「日本儒者頼山陽の史學」等の如く一人の個人をとり來つて其の史觀を論せられるものあれば、坂本博士「六國史について」西岡氏「物語風史學の展開」魚澄氏「日本往生傳類について」田山氏「平安朝の記録」藤本氏「僧傳の編纂と其形態」牧博士「武家法に規ゆる歴史觀」等の如く歴史著作のグループを取り上げられるもの、高柳氏「近世初期に於ける史學の展開」柴田氏「江戸幕府の修史事業について」等の如くある時代を限つて對象とせられるものもある。總じてかゝる論考を配置する事に依つて、本邦史學史全體を見透し、それが有する問題のことごとくを呈示する様に仕込まれたところに本編著の特色があるとせなければならぬ。栗田氏「書誌學の發達」相田氏「江戸時代に於ける古文書の採訪と編纂」大久保氏「近世に於ける歴史教育」喜田博士「日本歴史地理研究の沿革概觀」等は之等の全體的見透しの間配せられた特殊部門の發展を取扱はれてゐるものと言ふことが出来る。

然るに右の外に本書には更に二つの部類を含んでゐる。一は日本書紀の研究史であつて太田氏「上古に於ける日本書紀講究」中村氏「中世に於ける日本書紀の研究」小林氏「近世に於ける日本書紀の研究」等の一連の論説は之に當る。而して他は森氏「日唐、日宋交通に於ける史書の輸入」津田博士「愚管抄及び神皇正統記に

於ける支那の史學思想」加藤博士「大日本史と支那史學」伊東氏「洋學と歴史觀」鈴木氏「最近に於ける我が東洋史學の支那に與へし影響」今井博士「西洋史學の本邦史學に與へたる影響」前掲藤本氏「傳傳の編纂と其形態」等に見られるが如き本邦史學と外國に於ける史學との交流の問題である。此の二連の論説は各寄稿者の偶然的な一致によるのではなく、本書編纂者の意識的な方針に基づいてゐるものがあるであらう。もし果して然りとすれば、本書の編纂に當つて如何なる點が強く意識されてあつたかを察することが出来ると思ふ。

要するに本書は、多くの論説を集めながらも、尙ほ日本史學史が有するあらゆる問題を提出し之に解決を與へつゝ全體の見透しが可能なる様に仕組まれた點に特色がある。これに依つて讀者は一方的に偏することなき本邦史學史の本流を知りうるのである。(菊判上下二冊、一五〇二頁、昭和十四年五月、東京富山房發行、定價七圓五十錢)(高瀬重雄)

東西交渉史論

史學會編

明治二十二年設立せられ、全國に千五百の會員を擁する史學會が今般創立五十週年を記念せんが爲に、姉妹篇「本邦史學論叢」と共に發刊せられたのが本書である。執筆者三十一名、總紙數千四百有餘頁、誠に盛なりと云ひつ可きである。

題して東西交渉史論といふ、書名から來た自然の結果かも知れ

ぬが、この書が從來の邊曆型論叢とは著しく趣を異にした點が感ぜられる。第一には細かき考證よりも全般的な叙述が多く見當ることである。即ち古代より近世迄、殆ど歴史年代の全體に互つての問題を取扱つたものに、卷頭白鳥博士「東西交渉史上より見たる遊牧民族」はじめ、秋山謙藏氏「東西交渉史上の香料」三上義夫氏「東西交渉史上に於る科學」の三篇がある。白鳥博士の論文は、博士の持論たる東洋の歴史は南北・土著遊牧民族の對立を樞軸として廻轉する説を更に一步進めて、北方民族が南下を阻まれた時に西方に轉じて、東西の交渉を惹起する大勢を述べられしもの、三上氏の論文は古代東方人と希臘人との科學史上に於る位地に始まり、日本と支那とが科學に對する態度の相違を論ずるに終つてゐる。秋山氏は東西の民族が印度南洋に産する香料への欲求が世界の地圖を現今の如く變化せしめたりと説く。所論中、胡椒の如き調味料と、麝香の如き芳香料とを併せて香料と稱し、その欲求する所の主方向が何れにありやを分析されず、蘇木・犀角・眞珠までが特に混入してゐるのは些か奇異に感ずる。

歴史年代全般に互らぬでも、相當長き一時代に互つての研究は、原田淑人氏「正倉院御物を通して見たる東西文化の交渉」、岩井大憲氏「元代の東西交通」其他十數編に及び、これも従前の濼曆論叢に見なかつた現象である。吾人は斯かる概觀的研究を歓迎し、特に本書の如き過去五十年間史學界の總決算の意味を持つ論叢には最も適當なるを信ずる者であるが、同時に微に入り細を穿つ底の研究も益々盛でありたいことを希望する。